

明治期の少年雑誌『小国民』『少年世界』の 挿絵に描かれた中国人

金 山 泰 志

はじめに

本稿は、日清戦争前後の時期の日本の中国観を、挿絵や漫画といった視覚史料から明らかにするものである。執筆者は、明治期の教科書・講談・演劇・地方新聞・少年雑誌・総合雑誌などの様々なメディアを史料として、中国がどのように語られ描かれてきたのかを明らかにしてきた（拙著『明治期日本における民衆の中国観』芙蓉書房、二〇一四年）。しかし、拙著での検討は、文字史料に検討を限ったこともあり、挿絵や漫画といった非文字史料からの検討は行っていなかった¹⁾。

日本の中国観研究の蓄積は膨大で、様々な領野から検討がなされており、日清戦争前後期の中国人のビジュアル表現に関する研究も存在する。例えば、小松裕「近代日本のレイシズム―民衆の中国（人）観を例に」（『文学部論叢』七八、二〇〇三年三月）や、福井純子「おなべをもってどこいくの―日清戦争期の漫画が描いた清国人」（『立命館大学人文科学研究所紀要』八二、二〇〇三年一二月）、徐茜「日清戦争期の戯画が描いた中国」（『人間文化』三六、二〇一四年）などでは、当時の新聞や雑誌（『時事新報』や『団々珍聞』など）に掲載されていた漫画や風刺画において、清国人が否定的に描かれていたことが明らかにされている。²⁾

以上のような研究が存在する一方で、少年雑誌のビジュアル表現から、当時の中国観の反映を読み取った研究は管見の限りない。ここで注目すべきは、少年雑誌のメディア特性である。少年雑誌には、子供向けの娯楽として、わかりやすい善悪二元論でエンターテインメント化された記事や絵が溢れかえっている。戦争中においては、敵国である中国人に対する感情も過激に表現されている。一方で、少年雑誌は学校教育の補助的役割、修養書としての側面も持ち合わせていた。そこに着目すると、従来の先行研究が使用してきた大人向けメディアからは見えにくい日本人の中国観の一側面、すなわち古典世界の中国への尊敬と好意というポジティブな側面が浮かび上がってくる。本稿では視覚史料からその点の実証的把握も行っていきたい。

以上の問題意識のもと、本稿では日清戦争前後期の代表的な少年雑誌『小国民』『少年世界』を素材に選び、両雑誌の挿絵から当時の中国人がどのように描かれていたのかを明らかにする。

『小国民』は学齢館が一八八九年に創刊した少年雑誌、『少年世界』は博文館が一八九五年に創刊した少年雑誌で

ある。両誌の主な読者層は小中学生であり、その内容は「論説」「教育」「娯楽」「雑録」「読者投稿」など多岐にわたる。日清戦争が始まると戦争記事が激増し、敵国中国・中国人に関する記事も数多く掲載されることとなる。日清戦争前後期の検討を行う上で、適当な二冊といえる。

中国・中国人に関する記事が多く見える中で、本稿で注目すべきは、中国人を描いた挿絵である。ここで注意すべきは、少年雑誌の挿絵の多くは、文章記事に添えられた絵である、という点である。挿絵だけで判断するのではなく、文章記事で中国がどのように表現されているのかも、同時に検討する必要がある。ビジュアル史料と文字史料の複合的な検討の有効性を本稿では強調したい。

なお、本稿では「支那」に代わる通史的な呼称として「中国」を使用する。少年雑誌で描かれているのは、戦争で敵対した清国人だけではない。古典世界の中国偉人もまた、少年雑誌で数多く描かれた中国人であり、日本人の中国観の重要な一側面を形成している。

一．同時代の中国人を描いた挿絵

(一)「豚尾」

史料①は、『小国民』一八九三年二月一日号、明治太郎冠者作「少年狂言」という記事の挿絵である。この狂言作品の中には、日本人（岸田吟香）と「支那人」が登場し、その容姿を「尋常の支那服、例の豚尾髪をぶら／＼」

させて出づ」と紹介する。「豚尾^{チンク}」とは、清国人の象徴たる弁髪を豚の尻尾と蔑んだことに由来する蔑称であり、日清戦争を契機にあらゆるメディアに頻出することとなる蔑称であるが、すでに日清戦争前からこのような蔑称が使用されていることが、少年雑誌から確認できる。注目すべきは「例の豚尾髪」という表現である。一八九三年時点の日本において、清国人を象徴するお馴染みのトレードマークとなっていたことが読み取れる。

話の筋は、日本人が「支那」の主人から日本の歌を所望され、『からびとの、こゆびのつめがばからしく、ながくもこゝハ、ゐられざりけり』『しなびとの、あたまのかみのぶらくと、いつまでこゝにぶらつきをらん』と謡う。日本語がわからない「支那人」はこの歌にのせて踊らされてしまう。史料①はその時の様子を描いた挿絵である。小指の爪を伸ばすという中国風習及び、弁髪という身体的特徴を「ばか」にした内容であり、日清戦争前から同時代の中国人（清国人）への否定観が露わになっている一例である。

史料①と同じ作者の作品が、日清戦争中にも掲載されることとなる^③。史料②は、その挿絵であるが、日清戦争中のため、登場するのは凜々しい「日本兵士」と、遅鈍な「豚尾兵士」である。史料①は、どこか相手を小馬鹿にした内容で



史料②『小国民』1894年9月15日号、
太郎冠者「少年狂言」



史料①『小国民』1893年2月1日号
「少年狂言」

あったが、史料②からは、戦争相手国への明確な敵愾心が滲み出ている。例えば、清国兵を紹介した「成程豚尾は豚尻でおじやるは、此のやうなもの〔糠混じりの兵糧飯〕を食てゐては、人間のやうにも御座らぬ、併し致しやうも御座ない、是れに葱根〔史料②の豚尾兵が持っているもの〕がおじやる、此れを生で食て菜に致さう、ムシヤくく」などの表現が象徴的であろう。

(二) 激しい敵愾心

日清戦争中の敵愾心の高揚ぶりは、他の記事からも明らかであるが、当該期の特筆すべき点は、その憎しみの対象が、清国兵に限定されることなく清国人一般にまで広がっていることだ。

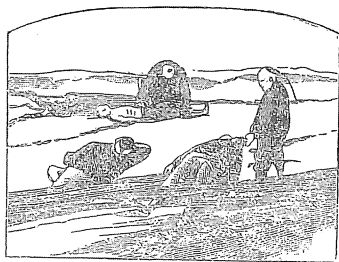
日本と中国が直接交戦した戦争として、一九三七年の日中戦争があるが、この時は中国兵と一般の中国人（無辜の良民）は明確に区別されていた。一般の中国人は、日本の庇護の対象として、戦争後に手を取り合っていく存在として取り扱われていたのである。実際の日中関係においても、一九三八年秋、日本政府は日中戦争の目的を東亜新秩序にあると主張し、一九三九年には親日政権が成立していた。ここには、日中戦争は日本の勝利で終わるであろうという、日本側のある種の余裕が読み取れ、中国側の実力を日本は「軽視」していた。その「軽視」は、過去に同じ相手に圧勝したという記憶、日清戦争の記憶も根強く残っていたと考えられる。

一方で、その日清戦争は、当時においては日本近代史上初めての対外戦争であった。中国（清国）兵と一般の中国人を区別する余裕などなかったのである。例えば、日清戦争中に「支那人」を紹介した『小国民』の記事を見て

みると、「其下卑不潔にして、吝嗇なるは、恐くは、世界上に其比なかるべし」と辛辣である^①。その「吝嗇」の証拠として、「予、一商店の前にイみてありけるに一豚漢^{ちんく}、小鑪にて、銀貨の周辺を削り、其銀粉を、小函に入れつゝあるを見たり。これ、一旦己の手に入りし銀貨は、悉く之を摩損せしめて其小量を掠め、後ち之を行使するなり。其ケチ思ふべし」と、作者自身が目にした中国（清国）人の「ケチ」ぶりを紹介する。史料③は、その中国人を描いた挿絵である。

「お金に汚い」というイメージも、日清戦争中に繰り返し紹介される中国イメージである。『小国民』一八九五年一月一五号「戦地雑聞」という記事では、兵士ではない「清人」が「死体の衣囊をさがし、金銭等を拾集する」様子が紹介されている。史料④は、それを描いた挿絵である。ここでも、「同胞の戦死を幸とし、小利に汲々たる薄情憎むべし」と、敵愾心に結び付けられている。

当然、直接交戦している中国兵（清兵）に対する敵愾心はさらに強い。史料⑤は、「豚尾奴の卑怯未練なる振舞を大笑ひに笑ひ遣らんが為に作りし」手鞠歌に添えられた挿絵である^⑤。よく見ると、手鞠が中国兵（清兵）の首になって



史料④『小国民』1895年1月15日号
「戦地雑聞」



史料③『小国民』1894年8月1日号、
周遊子「西国巡礼」

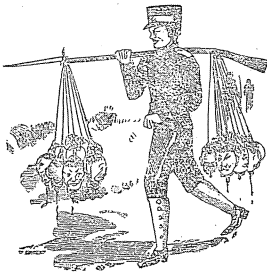
いる。手鞠歌の内容も「人と生れし甲斐もなく、豚と呼ぶる、憐れさよ」「乞食兵士」「欲に目の無い」「臆病」など、否定的表現が散りばめられている。

敵国への憎しみの感情は、敵国人の非道な行動が報道されることで一気に爆発する。「文明対野蛮」の戦争と位置付けられた日清戦争においては、清兵の野蛮ぶりを特に強調することとなる。『小国民』一八九四年一月一五号「清人の野蛮」は、その象徴たる記事である（その挿絵が史料⑥）。清兵の日本人に対する虐殺を紹介し、「更に切歯に堪へざるは、船橋里の激戦に我が忠勇なる将士の、或は戦死し、或は傷きて動く能はざる者を捕へ鈍刀にて其首と手腕とを斬り去れり。あゝ彼等の肉を噛み骨を裂くも尚恨ある惨事ならずや」と述べている。

「あゝ彼等の肉を噛み骨を裂くも尚恨ある」という思いは、史料⑦のような形で表れている。史料⑦は、「一つ一つ取り上げるほどの価値がないものとしてひとまとめに扱うこと」という意味の「十把一束」という記事に添えられた挿絵である。清兵の首が「価値のないもの」として乱雑にまとめられ、首から滴り



史料⑥『小国民』1894年11月15日号
「清人の野蛮」



史料⑦『小国民』1895年2月1日号
「十把一束」

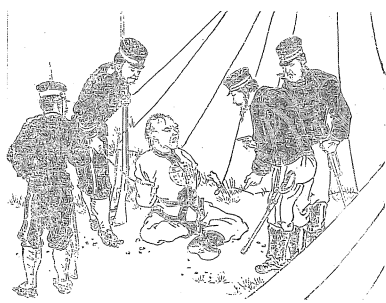
◎手鞠歌
 人と生れし甲斐もなく、豚と呼ぶる、憐れさよ
 乞食兵士
 欲に目の無い
 臆病
 敵国への憎しみの感情は、敵国人の非道な行動が報道されることで一気に爆発する。
 「文明対野蛮」の戦争と位置付けられた日清戦争においては、清兵の野蛮ぶりを特に強調することとなる。
 『小国民』一八九四年一月一五号「清人の野蛮」は、その象徴たる記事である（その挿絵が史料⑥）。
 清兵の日本人に対する虐殺を紹介し、「更に切歯に堪へざるは、船橋里の激戦に我が忠勇なる将士の、或は戦死し、或は傷きて動く能はざる者を捕へ鈍刀にて其首と手腕とを斬り去れり。あゝ彼等の肉を噛み骨を裂くも尚恨ある惨事ならずや」と述べている。

史料⑤『小国民』1895年2月1日号
「手鞠歌」

落ちる血の表現は、史料⑤と比べ滑稽さは皆無で、激しい敵愾心を一目で読み取ることができる。

ここで紹介しておきたいのが、次の『小国民』一八九五年二月一日号「義烈の清兵」という記事である。これまで見てきたように、日清戦争中の記事は、敵国人（清兵・清国人）への激しい敵愾心が露わとなったものが多くを占めていたが、この記事のように「支那兵をあながちに弱し弱しといふは大なる間違なり」という記事も少数ながら存在していた。「一個人として支那人の強きこと、中々我が日本人も及ばざること多し」「彼等が戦争に敗けるは、軍隊の組織がよろしからず、大将の号令一致ならず、平生の訓練行き届からざる等に基づくなり」「我が小国民諸君、努々彼を弱いものなぞと思ひ侮りて油断し給ふべからず。諸君が成長の頃には、彼等如何なる勁敵となるやも測り難し」と、冷静な筆致で他の記事とは一線を画す内容となっている。事実、その数十年後の日中戦争では、中国兵はまさしく「勁敵」となっていた。この記事では、捕虜となっても頑として口を開かず、速やかに死を望む「戦争中敵ながらも義烈」な清兵がいたことを紹介する。史料⑧は、その「義烈な清兵」を描いたものである。「敵兵ながら感ずべき勇士」であれば、これまでに描かれていた中国兵（清国兵）とは異なり、敵国人であっても凛々しく描かれるのである。

その一方で、その「義烈の清兵」を認めるのは、「彼は敵兵なれども、義勇の士、軍人の模範たり」と述べる日本人の少佐である。また、最終的に「義烈の清兵」は、日本が此度の戦争に至った道理に服し、日本兵の「懇切なること



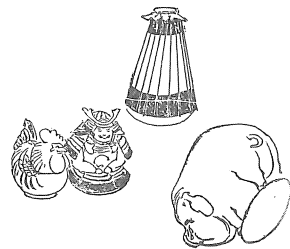
史料⑧『小国民』1895年2月1日号
「義烈の清兵」

「無礼」「遅鈍」「野蠻不潔」と徹底的に罵っている様子は、当時の日本人の中国人に対する態度そのものである。

史料⑩も、巖谷の小説「あやまり小法師」⁽⁸⁾の挿絵である。「豚」の起き上がり小法師が清国、「武者」の起き上がり小法師が日本として描かれている。作中の豚の起き上がり小法師は、何度やっても起き上がらないので、あやまり小法師と呼ばれてしまう。起き上がれない理由は、「出来が悪い」からだとし、「形が不格好に大きくばかりあつて、肝心の脚に力がないから」と作中で述べられている。当時の中国が豚に譬えられている一例でもある。

右の記事の他に、同時代の中国(清国)を「豚」として扱っているものとしては、「豚追」を紹介した記事がある。⁽⁹⁾日清戦争開戦以来、豚を遊技場に解き放って、子供たちが竹刀をもってこれを追いかけて打つという遊びが日本各地で流行しているという。その様子を描いた挿絵が、史料⑪である。この記事では、清国人は豚の根拠として、「支那蛮人の豚に似たるは、独り其辮髮の尾を類するのみに非ず、彼れの愚にして無能なる、又至て臆病なる、皆能く醜豚に似たり」と説明する。

ここで注目すべきは、「支那」に「チャンく」のルビが振られている点で



史料⑪『小国民』1894年12月1日号
「敵愾心の発頭(中)」

史料⑩『少年世界』1895年4月15日号、
漣山人「あやまり小法師」

ある。先行研究の中には、「支那」は侮蔑語ではないとするものもあるが、この記事のように侮蔑的意味合いを込めて使用されていた例もあった。「支那」に侮蔑の意味合いが込められていたか否かについては、「支那」という言葉が使用されていた近代日本において、「支那」及び「支那人」がどのように語られていたのかを総体的に把握することが必要であろう。これまでの執筆者の研究においても、「支那」という言葉とともに、何らかの否定的表現や否定的評価が付随している例は枚挙にいとまがない。¹¹⁾

(四) 戦争後も見え続ける否定観

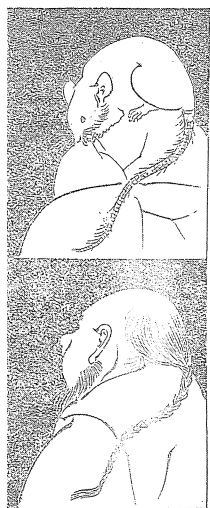
日清戦争が日本の勝利で終結すると、激しい敵愾心の宣揚を目的とした、過激な表現はなくなっていくが、同時代の中国(清国)人を小馬鹿にしたような記事は誌面に一定数見え続けている。

『小国民』では、例えば史料¹²⁾のような清国人の身体的特徴(弁髪)を嘲笑する挿絵も見られる。史料¹³⁾は、『小国民』の読者投稿欄に投稿された絵であるが、「支那人の



〈支那人の法遊經のクタンセ人那支〉

史料¹²⁾『小国民』1895年8月15日号
「笑林欄」



〈支那人の狹帯に髪を相まると若干。徳島縣工藤六三郎觀覽〉

史料¹³⁾『小国民』1895年8月15日号、
徳島県工藤六三郎投寄(読者投稿)

狡猾は、鼠と相さること若干」と、清国人が鼠にも譬えられている。⁽¹³⁾

そしてその否定観の対象は、人に留まらず、同時代の中国の制度や環境にまで拡大していく。史料⑭は、一八九五年八月一日号「支那裁判所」という記事の挿絵であるが、その裁判の実態について、「支那人は、罪を侵すことあるも、金銭に富む者は、多くは無罪にて事すむなり。其ゆゑは、裁判官への賄賂によつて、罪の有無軽重を定むることにして、民事の訴訟に於ても亦同じ。支那人の辞に、富者に非ざれば、訴訟を起す能はずとは、彼国にて、知れ亘りたることなり。されば、罪人が、判官の前に出づれば或は泣き悲み、或は平蛛の様になつて謝り、或は哀れ氣に分疏するなど、只管判官の憐みを請ふより、手段なしとは如何にも浅ましき事ならずや」と、その野蛮な制度を「輕蔑」をもって紹介している。

『少年世界』では、日清戦争終結後すぐの小説に、子供が「支那人」の藁人形を叩いて遊んでいる描写があり（史料⑮）、子供の台詞も「豚尾坊主の弱虫なんかに負るもんか。も一つ打つて遣るぞ。やァい、打たれやがッたらう。ざまァ見ろやァい。わァい〜」⁽¹⁴⁾と、戦争中の強い敵愾心が創作作品からうかがえる。



史料⑭『小国民』1895年8月15日号
「支那裁判所」



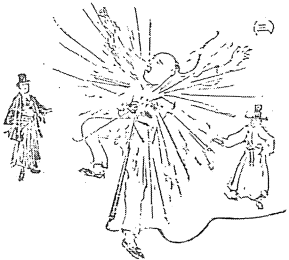
史料⑮『少年世界』1895年5月1日号
「子供ごころ」



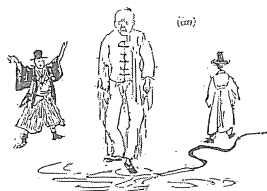
いなる氷のふいうごは筒御ノコ



！だ理道ものいな出はてけつ踏ヲコ



ダッガアヤ出に度一ッ



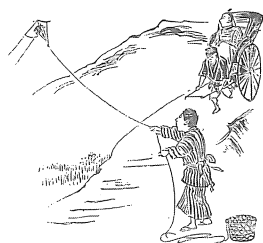
々々々いて冷トアツ

史料⑬『少年世界』
1896年3月1日号「寄書欄」

史料⑭は、日清戦争終結後から二年後の一八九七年九月一日号「奉公」という記事の挿絵であるが、ここで描かれている中国人（清国商人）も、日本人の子供（大坂の米穀会社の「稚」を馬鹿にし、嘘をつく「づるい」人物であった。また、『少年世界』の寄書欄（読者投稿欄）を見てみると、「支那人」及び「支那人」の弁髪を嘲笑した四コマ漫画を確認することができる（史料⑰⑱）。少年雑誌の受け手（読者）もまた、少年雑誌を提供している送り手側（大人）と同様の中国観を有していたことがわかる。日清戦争後において、中国（清国）人は「嘲笑」の対象となっていたのである。



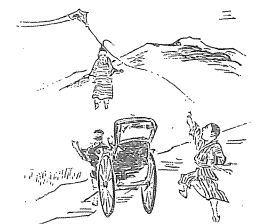
史料⑱『少年世界』1897年9月1日号
「奉公」



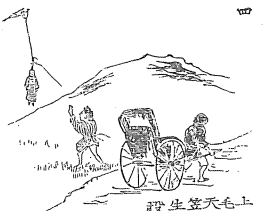
好上よくぞるだう紙の強いの



レハ火のまじりす



ア線切れて飛んで人してまわ



上も天笠生役

ア ア 見 事 々

二・古典世界の中国人を描いた挿絵

明治前期は所謂「漢学愛好」の雰囲気を残した時代であった。小学校の教科書教材にも数多くの中国偉人や漢籍が教材として扱われていた。¹⁶⁾これらは、児童の人格涵養に役立つものとして、教育的価値のあるものとして肯定的に扱われていたのである。

戦前の少年雑誌は、小学校教育の補助的役割を担っており、教育的価値があるという点も、少年雑誌を実際に購買する父母（読者の親）への重要なセールスポイントであった。そのため、教育的要素の強い記事には、孔子や論語に代表される昔の中国偉人や漢籍が題材として扱われることも多かった。

特に日清戦争前の少年雑誌においては、その傾向が強く表れている。例えば、現在でも『三国志』の英雄として

は数多く取り上げられていた。挿絵があるものとして、例えば一八九四年六月一日号「秦西巴」がある（史料²³）。

注目すべきは、以上のような中国偉人は、少年雑誌の教育的な話の中で、その逸話・格言が頻繁に引用されている点である。象徴的なのが「孔子曰く」の引用である。

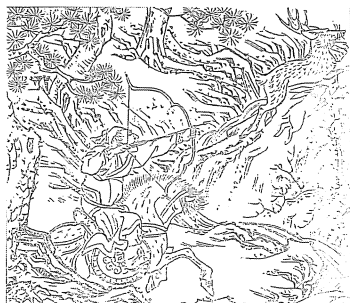
ここでは、「孔子曰く」以外の例を見てみよう。例えば、一八九三年二月一日号、幸田露伴「問ふことの価値」という記事は、「質問は即ち智慧の母なり」と「問う」ことの重要性を説いた教訓的記事である。智者や賢人と尊ばれる人も、「能く質し能く問」うているのだと説いている。

の話の中で「異常の天稟」を有する人物の逸話として、「漢の王充が書賣の店頭にて立ちながら書を読み忘るゝこと無く、北齊の邢邵が五日にして漢書を読み尽して徧く記せる」ことが紹介されている。史料²⁴は、「王充店頭にて書を読む図」という当該記事の挿絵である。

以上のように、古典世界の中国人は「偉人」として肯定的に描かれており、そこには同時代の中国（清国）人に見られたような否定的イメージ（侮蔑・嘲笑）はない。また、幸田露伴に代表されるように、中国文化に造詣の深い人物



史料²²『小国民』1894年6月15日号、露伴「漢書の作者」



史料²³『小国民』1894年6月1日号「秦西巴」

が、「漢学愛好」の明治時代には数多く存在していたことも、肯定的な古典世界の中国イメージが当時のメディアに表出していた要因として重要である。

古典世界の中国偉人への肯定観は、日清戦争の影響で肯定から否定へと転換することはなかった。あくまで憎むべき敵国は、同時代の中国（清国）ということであり、古典世界の中国にまで否定観が及ぶことはなかったのである。

それを象徴するのが、『少年世界』一八九五年二月一日号、京の藁兵衛「軽口風船玉」という記事である。短い笑話が数点掲載されているが、日清戦争中ということもあり、中国人を小馬鹿にした内容のものもある。

その中の一つ「関羽の躰量」という話では、「支那人」が「日本人」より体重が軽い（体が小さい）と馬鹿にされているため、「例の負惜みの了見から」、実際に体重計にのってみると「憐れや」、本当に十二、三貫しかなかった。悔しくてべそをかいていると、廟から関羽が出てきて、「嗚呼、言ひ甲斐なき奴輩である、今乃公の躰量を見て魂を失ふこと勿れ」と、悠然と体重計にのると五十貫もあった。しかし、「如何に関羽様じやと云て、こんなに躰量のあるべき理由がない」と、よくよく関羽の姿を見てみたら、「八十二斤の青龍刀」を持っていた、という笑い話になっている。一見、関羽自体も嘲笑の対象になっていそうであるが、八十二斤の青龍刀の重量を差し引いて



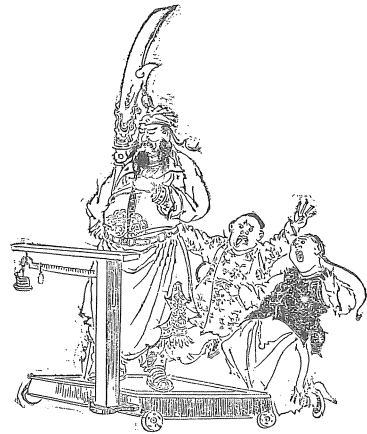
(國王頭を啓てに願ひ圖)

史料②『小国民』1893年2月1日号、
幸田露伴「問ふことの価値」

も、関羽の体重は同時代の中国（清国）人よりは重く体も大きい。それを裏付けるように、当該記事の挿絵（史料²⁵）では、同時代の中国（清国）人の二人と、古典世界の中国偉人である関羽の描かれ方は明らかに異なっている。日清戦争中であっても関羽は凛々しく描かれているのである。

日清戦争を契機に、日本人の否定的中国観が一般に浸透したことは、先行研究で従来指摘されてきた通りである。戦争の時代においては、敵愾心を煽り、愛国心を高めることが求められるため、敵国の中国人は醜悪に描かれる。

一方で、戦争のイデオロギーとは別に、日本文化の源である古典世界の中国への尊敬と好意は消え去ることはなかった。それは、その後の大正・昭和期においても同様であった。大正・昭和期の少年雑誌でも、『水滸伝』に登場する武松は凛々しく勇ましい「豪傑」として描かれ、韓信も「立志」「忍耐」の象徴として「偉大なる」人物として描かれている。¹⁸この古典世界の中国への尊敬・好意の感情は、古き時代から現代に至るまで、日本人の心の深層に生きているといえるだろう。



史料²⁵『少年世界』1895年2月1日号、
京の藁兵衛「軽口風船玉」

おわりに

以上、明治期の少年雑誌『小国民』と『少年世界』の挿絵から、当時の中国観の反映を見てきた。

中国人の描かれ方だけを見ても、同時代の中国（清国）に対する否定的眼差し、古典世界の中国への肯定的眼差しが存在していたことは明らかである。文章記事での表現を踏まえると、この傾向は一層浮き彫りになる。

同時代の中国（清国）人が否定的に描かれていた理由は、本稿の検討時期である日清戦争の影響が何よりも大きい。そこには、敵愾心の宣揚という明確な目的があった。敵愾心の強さは愛国心の強さに結び付けられる。当時のナショナリズムと対外観の関係は、現在の日本の偏狭なナショナリズムを考える上でも示唆的である。

これまでの執筆者の研究成果を踏まえると、日清戦争に代表される日本と中国との敵対関係が、その後も継続的に続いていたこと、すなわち近代日本の歴史が中国との敵対関係の歴史であったことが、同時代の中国への否定観を日本社会一般に根付かせたと結論付けることができる。

当時の新聞・雑誌の風刺画や漫画で、同時代の中国人が侮蔑的に描かれていたことは、先学で既に指摘されている。しかし、中国に対しては、否定的な眼差しのみが向けられていたのではない。本稿で見えてきたように、古典世界の中国偉人は「凛々しく」「勇ましく」描かれており、そこに否定的要素は皆無であった。中国人が時代によって描かれ方が異なるという点、すなわち日本人の中国観の二面性（同時代への否定観、古典世界への肯定観）は、

当時の視覚史料からも浮き彫りになるのである。

古き良き中国イメージを日本人が抱き続けていたことは、明治期以降の日本の対中政策を考える上でも重要な意味をなす。それは、「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」といった思想や政策を、一般の人々が感情面から理解する上で大きな役割を果たしたと考えられるからである。また、「古き良き中国イメージ」が多くの日本人の共通理解であったからこそ、古き良き「支那」に戻す、というような日中戦争の大義名分が日本では受け入れられていたとも指摘できる。¹⁹⁾

日本人の一般的な中国観を捉える上で、本稿のような視覚史料からの検討は必須である。少年雑誌に限らず、あらゆるメディアで中国は描かれている。今後、明治・大正・昭和と幅広く関連史料の収集と分析を続けていきたい。

註

(1) 大正期以降の検討では、挿絵や漫画などの視覚史料も扱っている(拙稿①「大正期の少年雑誌に見る日本の中国観―読者の生活にも注目して―」『生活文化史』六六号、二〇一四年九月)。

(2) その他、韓相一・韓程善著、神谷丹路訳『漫画に描かれた日本帝国―「韓国併合」とアジア認識』(明石書店、二〇一〇年)、岡村志嘉子「日清戦争を描いた雑誌―『日清戦争実記』と『日清戦争図絵』のビジュアル表現』(『国立国会図書館月報』六一一号、二〇一二年二月)など。執筆者も、書評の中で『日清戦闘画報』というグラフィック・メディアを用いた検討を行ったことがある(拙稿「大谷正・福井純子編輯『描かれた日清戦争―久保田米遷『日清戦闘画報』影印・翻刻版』『メディア史研究』四〇、二〇一六年一〇月)。新聞漫画の歴史については、茨木正治『メディアのなかのマンガ―

新聞「コママンガの世界」(臨川書店、二〇〇七年)に詳しい。

- (3) 『小国民』一八九四年九月一五日号、太郎冠者「少年狂言」。
- (4) 『小国民』一八九四年八月一日号、周遊子「西国巡礼」。
- (5) 『小国民』一八九五年二月一日号「手毬歌」。
- (6) 『小国民』一八九五年二月一日号「十把一束」。
- (7) 『少年世界』一八九五年二月一五日号、漣山人「駄法螺」。
- (8) 『少年世界』一八九五年四月一五日号、漣山人「あやまり小法師」。
- (9) 『小国民』一八九四年二月一日号「敵愾心の発頭(中)」。
- (10) 入江昭編著、岡本幸治監訳『中国人と日本人―交流・友好・反発の近代史―』(ミネルヴァ書房、二〇一二年) viii頁。
- (11) 前掲拙著・拙稿①の他に、拙稿②「一九三〇年代の『少年倶楽部』に見る日本の中国観」(『メディア史研究』四五号、二〇一九年三月) など参照。例えば、日中戦争中の少年雑誌では、「支那」の「乱暴」「不義」「無礼」「無法」「卑怯」「卑劣」ぶりが誌面で繰り返し強調されており、ネガティブな表現が定型句のように使用されている。
- (12) 『小国民』一八九五年八月一五日号「笑林欄」。
- (13) 『小国民』一八九五年八月一五日号、徳島県工藤六三郎投寄(読者投稿)。「少年世界」一八九六年二月一五日号、西井翠山「鼠の敵」という記事でも、清国兵(「チャン／＼坊主」)が鼠に譬えられている。
- (14) 『少年世界』一八九五年五月一日号「子供ごころ」。
- (15) 一ページに「コマ、ページをめくると次のコマが現れるという趣向になっており、今の四コマ漫画とは厳密には異なる。
- (16) 前掲拙著、第一章参照。
- (17) 『小国民』一八九三年九月三日、太華「和漢忠烈伝」。
- (18) 『日本少年』一九二三年七月一日号、高須青兒「水滸伝英雄武松の虎退治」、『少年倶楽部』一九三二年六月号、隅田富美恵「韓信」。両者ともに挿絵がある。詳しくは、前掲拙稿①②を参照のこと。
- (19) 拙稿②、八一〜八二頁。